

教会活動に対する青年の動機づけ

——日本聖公会 11 教区の青年活動——

19051063 荻野 直人

指導教員 立木 茂雄

教会活動の社会学

——日本聖公会 11 教区の青年活動——

目次

1. 序論	1
2. 日本聖公会	2
2-1 沿革と組織	2
2-2 教区	3
1 各教区の青年活動	9
3-1 日本聖公会全国青年ネットワークニュース	10
3-2 活動内容の分類	11
3-3 社会的行為としての諸活動	16
3-4 11 教区の比較	20
2 青年活動が引き起こされる要因	27
4-1 客体から付与される目標	27
4-2 集団の膨張にともなう表出的行為の増加	28
3 結論	29

1. 序論

「日本人は無宗教である」。このような認識をもっている人は、決して少なくないだろう。むしろ、多くの人が「日本人は無宗教である」と認識しているのではないだろうか。無宗教とは、信仰する宗教をもっていないということである。

しかし、宗教統計調査（文化庁 2007）によると、宗教団体および宗教法人における信者総数は 208,845,429 人である。¹ これは、2005 年時点の日本の総人口 127,767,994 人（国勢調査 2005）の 2 倍に迫る数字である。宗教統計調査は、宗教団体および宗教法人の文化庁への自発的な報告という方法で行われているので、日本の総人口よりも信者数が多いという統計データが生まれている。神社神道系は地域住民を氏子（つまり信者）として数える場合があり、仏教系では檀家を全て信者として数えているので、統計上の信者数と実際に信仰をもっている人数と重ならない部分がかなりある。また、団体によって信者という立場の捉え方も異なる場合もあれば、信仰に対する認識も個人によって多種多様である。そのため、社会の中で「何らかの宗教を信じている人」の人数を把握することは極めて困難である。

一方で、宗教は社会に対して強い影響力をもっていることも事実である。歴史的にも、宗教団体は医療・福祉・教育という分野において、それぞれの宗教的な信仰を土台とした革新的な働きによって、社会を改革するきっかけになってきた。その反面、政治や社会状況との関わりの中で、ときに宗教は戦争や差別などの暴力に加担している現実も存在している。国家による政治的な戦略に、宗教の教義・信仰・思想が利用され、各宗教団体が本来めざしている実践からかけ離れた行動となって現われるということを、私たちの社会は経験してきた。このように、宗教と社会は密接不可分な関係にあるという認識に立脚したうえで、次章からは筆者もかかわりが深いキリスト教団体である宗教法人日本聖公会（以下、日本聖公会）の青年活動と社会との相互関係について考察を深めていく。² 筆者が教会内で行われている活動の中から青年活動に焦点を当てた理由は、先行研究が乏しかったことと、近年減少傾向にある青年信徒と教会の関係を考えていくうえで、本研究が有益な材料となり得るという思いからである。

日本聖公会では、各教区、各教会、ときには全国規模で多方面にわたる青年活動が行われている。筆者自身、日本聖公会で青年活動にかかわっており、活動の内容が教区によって異なっていることに気づかされる経験をしてきた。本論文では、教区によって青年活動

の内容が異なる要因を、社会学的な視点から問いかける。私たちは、特定の宗教に対する信仰を土台としている集団が行う諸活動は、その信仰や宗教的な思想の実践が個人や集団の動機となっていて行われていると考えがちである。もちろん、信仰の実践に対する思いが活動の動機の一部を担っている場合は多いに考えられる。しかし、果たしてその信仰に基づく動機の上に依拠しているといえるだろうか。宗教団体内での活動に対する個人、集団の動機を宗教に対する信仰のみに求めるということは、宗教団体や宗教法人が社会的な存在であるという事実を見逃すことになる。個人は社会的なものである、常に他者との相互作用を行っているし、集団は取り巻く環境との相互作用を絶え間なく続けている。この原則は、どのような集団にも当てはまるわけであり、宗教的な集団も例外ではない。しかしながら、我々は宗教という枠組みからでしか宗教的な集団を捉えようとはしていない。本論文では、青年たちがキリスト教団体という組織のもとで取り組んできた活動のひとつひとつが社会的行為であることを見つけ直したい。

まずは次章で日本聖公会という組織と、構成する教区の姿を紹介したうえで、3章以降は、各教区における青年活動の内容について、パーソンズが理論として体系化した〈道具的行為〉と〈表出的行為〉(Parsons & Shils 1951)という社会的行為の枠組みを用いて、日本聖公会における各教区の青年活動の実相に迫る。

2. 日本聖公会

2-1 沿革と組織

まず、本研究の調査対象として選んだ宗教法人日本聖公会（以下、日本聖公会）について、その沿革と現在の組織形態について説明する必要があるだろう。

聖公会 (Anglican Communion) とは、16 世紀に成立したイングランド国教会から生まれたキリスト教会である。その後のアングロ・サクソン民族の興隆とともに、米国、カナダ、豪州、インド、南米、アフリカ、中国、その他の国々に広がり、2009 年時点では 44 の管区（管轄地域）によって構成され、160 ヶ国を超える国で約 8000 万人の信徒を抱えている。³ (Anglican Communion Official Website) ローマ教皇の教権と統治に逆らった点ではプロテスタントであるが、教義はカトリックと共通した点が多く、カトリックとカプロテスタントの中間的立場をとっている。

日本においては、1968 年の米国聖公会宣教委員会による宣教師の派遣をはじめに、1873

年には英国聖公会福音宣布協会からは2人、以後カナダ聖公会からも宣教師が派遣されることとなり、1887年に聖職と信徒によって第1回総会が開かれ、日本聖公会が組織されることとなった。(キリスト教年鑑 2009) 現在は、全国11教区から成り、日本管区として Anglican Communion のうちの管区としての役割を担っている。全国に、312の教会・伝道所があり、272人の教師と54,878人の信徒が所属している。⁴ (キリスト教年鑑 2009)

概括的ではあるが、以上が日本聖公会の組織形態と位置づけである。次の項では、日本聖公会を構成する11教区の地理的な構成や教会数、信徒人口、教師の人数などの分布に目をむけていく。

2-2 教区

(1) 管轄する地域

各教区には、それぞれ最高責任者のような役割と権限をもっている主教がひとりずつ配されており、最も中心的な役割を果たす主教座聖堂がある。日本聖公会を構成する11教区と主教座聖堂の所在地は表1のとおりである。教区の区画は、都道府県をひとつのまとまりとしてその集合体で構成されているが、大阪府の一部を含む京都教区、兵庫県の一部を含む大阪教区のような例外ケースも見られる。各教区とも、地域内で産業的にもっとも発展している都市部に主教座聖堂が配置されているのは、交通アクセスのよさや、人口の集中という点から理解できる。

表1 11教区と主教座聖堂の名称及び所在地

教区	含まれる都道府県	主教座聖堂	
		教会名	所在地
北海道	北海道	札幌キリスト教会	札幌市北区
東北	青森県、岩手県、秋田県、山形県、福島県	仙台基督教会	仙台市青葉区
北関東	茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県	前橋聖マッテヤ教会	群馬県前橋市
東京	東京都	聖アンデレ主教座聖堂	東京都港区
横浜	神奈川県、千葉県、静岡県、山梨県	横浜聖アンデレ教会	横浜市神奈川区
中部	新潟県、長野県、岐阜県、愛知県	名古屋聖マタイ教会	名古屋市昭和区
京都	京都府、富山県、石川県、福井県、滋賀県、三重県、奈良県、和歌山県、大阪府（一部）	聖アグネス教会	京都市上京区
大阪	大阪府、兵庫県（一部）	川口基督教会	大阪市西区
神戸	兵庫県、岡山県、広島県、鳥取県、島根県、山口県、愛媛県、徳島県、高知県、香川県	神戸聖ミカエル教会	神戸市中央区
九州	福岡県、佐賀県、長崎県、宮崎県、鹿児島県、大分県	福岡聖パウロ教会	福岡市中央区
沖縄	沖縄県	三原聖ペテロ聖パウロ教会	沖縄県那覇市

「『キリスト教年鑑』(2009)をもとに作成」

10 県にまたがって管轄されている神戸教区から、地理的要因や人口的要因によって 1 都道県によって成立している北海道教区、東京教区、沖縄教区までが存立している。この事実、教区を運営するうえでの社会的な状況が教区によって多様であることを示している。教区ごとの広さを視覚的に表現したものが図 1 であるが、教区ごとで管轄する地域の面積に広狭かなりの幅があることがわかる。

教区のア積の広狭は、教区活動にどのような影響を及ぼすだろうか。教区全体としての活動を考えた場合、面積が広いことによる不利益として一つ目にあげられるのは、「集まりにくさ」である。筆者は、日本聖公会の信徒であり、大阪教区に所属しているのだが、「大阪教区は集まりたい時にすぐに集まることができていいね」という言葉を京都教区に所属する青年たちから何度も言われた経験がある。主教が教区を運営するうえでは、どのような影響が考えられるだろうか。教区がいくつもの県をまたがり、各教会がそれぞれ離れた場所にあるということは、教区のア心である都市部から遠く地理的に末端に位置している教会には中央からの権限は弱まる。そのために、主教は教区をある一貫した方向性をもって運営していこうとすれば、統制をとることに苦心する。

では、教区が広いことによって得ることができる利益はなにか。中央からの統制が強く効きにくいということは、教会運営や活動は、各教会に勤務する教師をはじめとする信徒の自治運営に委ねられる部分が増加する。この自治運営によっては、同じ教区内の他教会にはみられないような独自の活動が展開される可能性が生まれる。さらに、独自の活動は教会と信徒自身のエンパワメントの強化につながり、教会の発展にもつながる。

面積の小さい教区に関しては、以上で述べたこととは逆の影響を享受することとなる。教区として統制のとれた運営がおこなわれているが、各教会に個性がなく、運営は教区の中央に委任してしまうかもしれない。反面、物理的な近さは教会どうしでの綿密な連携を生みやすい環境ともいえる。教区の活動内容と、教区に与えられた地理的環境は相互に関係しており、教区の特徴や雰囲気形成する過程で、見逃すことのできない構成要素のひとつである。

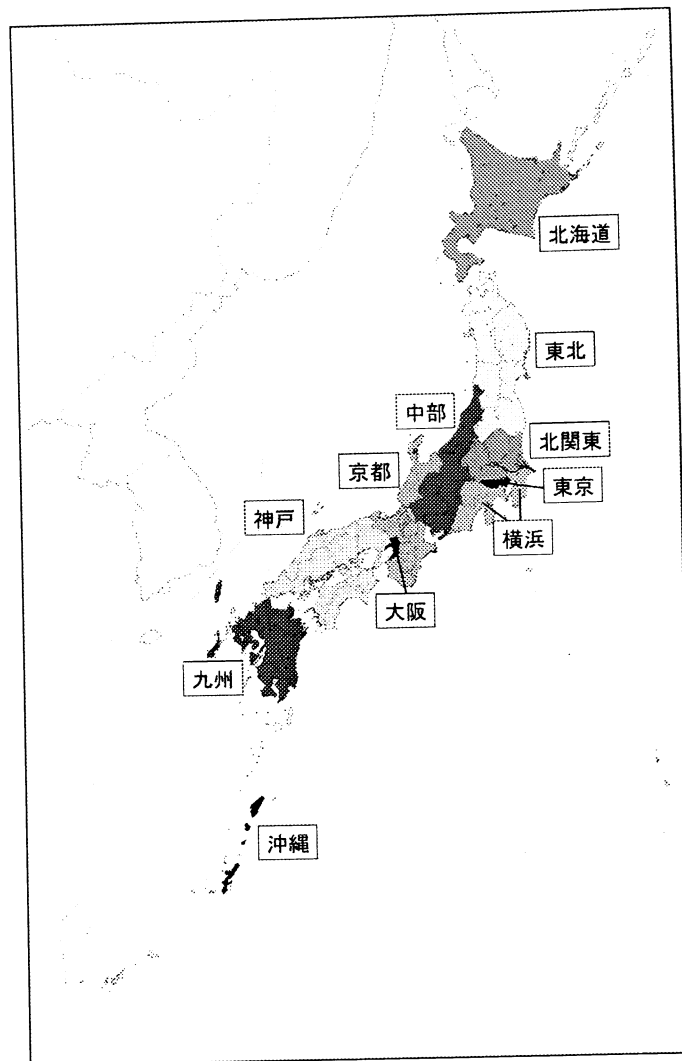


図1 11 教区の地理的分布（筆者作成）

(2) 信徒、教会、教師

次に、各教区の信徒、教会、教師の数に注目して、特徴を探っていく。信徒は、各教会、教区の活動の主な実施主体であり、活動するための資金を献金という形で集めている。教会においては、もっとも中心的な構成要素といえる。教会、教区の運営は主に信徒の献金によってなされているため、信徒の人数は教区の財政に直接的な影響を及ぼす。教会と教師は、教区内の各教会の運営方法を左右する要素である。日本聖公会の全教会は、日曜日の午前に礼拝をするため、ひとつの教会・伝道所には原則として最低で1人の司祭が勤務していなければならない。⁵ そのため、教区の運営は教会数と教師の人数という基本的条件のうえに成り立っている。その条件によっては、可能な活動と制限される活動が生まれてくる。いわば信徒、教会、教師は教区内の青年活動を実施していくうえでの基本的な資

源ともいえる。以下、図 2、3、はそれぞれ各教区の信徒数、教会数、教師の人数をグラフにしたものである。なお、教師の人数については司祭と、司祭職の前段階でもある執事の人数でグラフを作成した。⁶

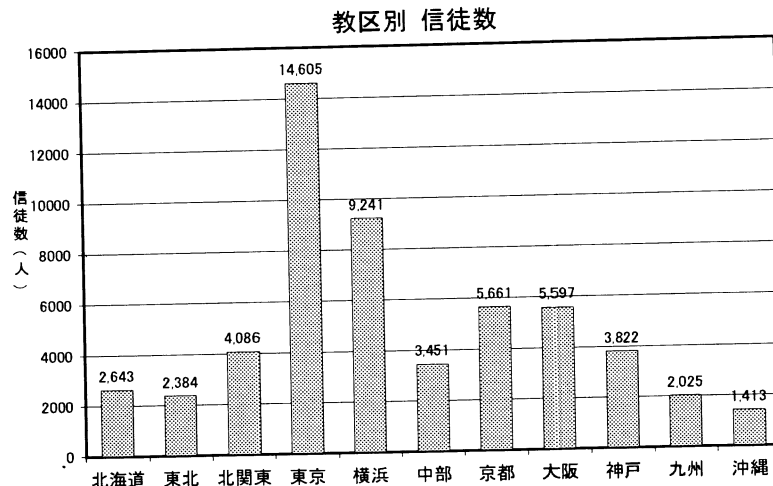


図 2 教区別信徒数(「キリスト教年鑑 2009」より筆者作成)

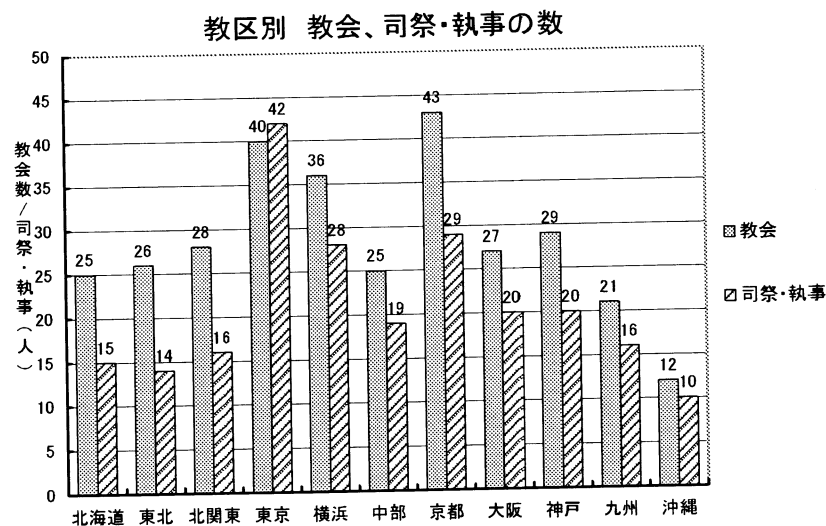


図 3 教区ごとの教会数と司祭・執事の人数

(「キリスト教年鑑 2009」より筆者作成)

まず、教区の信徒数を比較した図 2 からは、最小の沖縄教区 (1,413 人) から最多の東京教区 (14,605 人) まで、教区によってかなりの差があることが分かる。

教会数はどうだろうか。信徒数が多い教区には多くの教会が建てられているというわけ

ではないようだ。京都教区は、信徒数規模がほぼ同じ大阪教区に比べて 16 教会多く存在し、その数字は全 11 教区で最も多い。この理由の一つは、教区の管轄地域が広範囲に及ぶからと考えられるが、それだけですべての説明がつくわけではない。一方で、同様に管轄地域が広い東北、中部、神戸教区は京都教区ほど教会の数が多い。東京、横浜教区が信徒数と同じように京都を除く他教区よりも多くの教会があるということは、信徒からの教会に対するニーズが他教区よりも大きいことから納得がいく。また、一定の信徒数がいなければ献金収入がないために教会の運営は困難になる。京都教区のみが、その他の教区に見られる、地域面積が広い教区もしくは信徒数が多い教区は教会の数が多いという法則があてはまらない。おそらく、聖公会が日本に宣教される段階での時代的背景や、日本聖公会が今日のような組織として成立していく歴史的な過程も大きな影響を及ぼしていると推察されるが、その検証は本論文では扱わないので他の聖公会歴史研究に委ねることとする。

信徒の人数と教会数から、11 教区の大まかな規模はつかめたので、次に教区に属する各教会に焦点を当てる。図 4、5 は、それぞれ 1 教会あたりの信徒と司祭・執事の人数を表している。

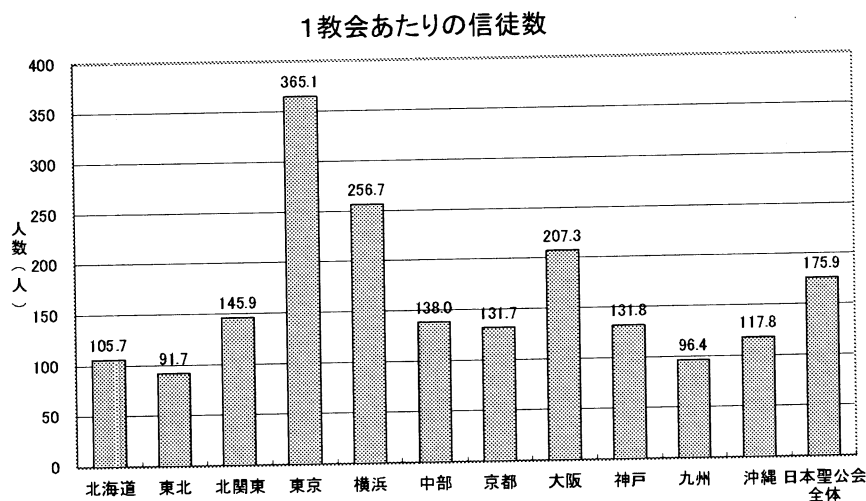


図 4 1 教会あたりの信徒数

(「キリスト教年鑑 2009」より筆者作成)

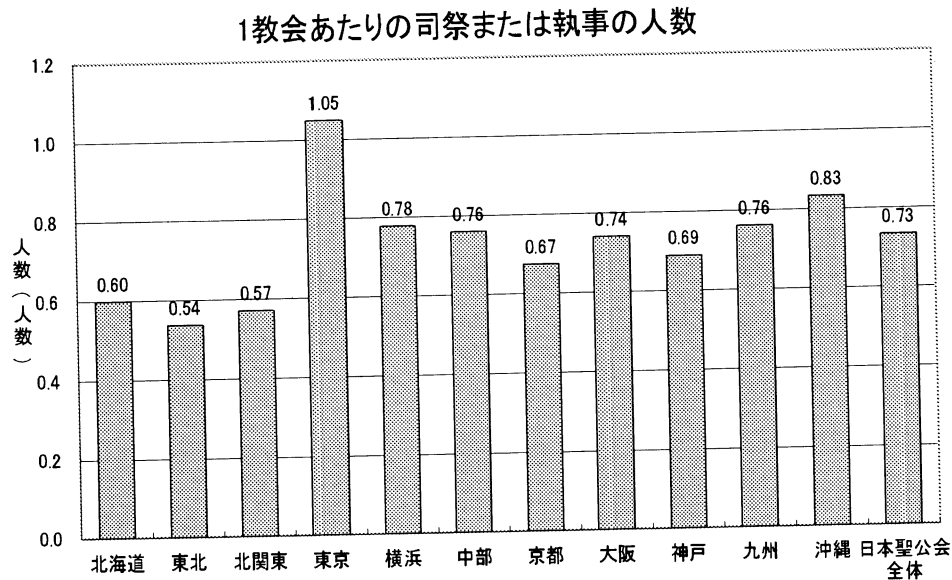


図 5 1 教会あたりの司祭または執事の人数
(「キリスト教年鑑 2009」より筆者作成)

信徒数が多い教会の礼拝は、それだけ多くの信徒が集まるので、日曜日は賑やかな教会になる。教会の中で独自に青年会が結成されたり、信徒が教会でグループをつくってボランティア活動をするなど、様々な活動が展開されている場合も多い。信徒数は、教会の全体的な規模の大きさを示す指標になる。とりわけ、財政的な規模は信徒数によって大きな影響を受ける。先にも記述したように、教会の収入の多くは信徒の献金から成っており、その収入で教会と、教会をまとめている教区を運営している。教師の給与も、この内から充てられる。

図 4 は、各教区の信徒数を教会数で割った数字を比較したグラフである。このグラフからは、数字そのままというわけにはいかないが、各教区の財政状況がうかがえる。ここで、教区の財政状況を把握しておく理由は、3 章で詳述するように各教区では様々な青年活動が行われており、その中にはキャンプや遠方での宿泊をともなう研修、機関紙の発行など、財政面も含む教区からの支援がなければ実施することができない活動も含まれ、青年活動に対する教区の関わり方と財政状況に何らかの関係性があると推察できるからである。グラフが示すとおり、各教区の教会の規模にもばらつきが見られ、11 教区を 3 つのグループに分けることができる。第 1 グループは、日本聖公会全体での平均値 175.9 を超える東京、横浜、大阪。第 2 グループは、130 から 175.9 までの北関東、中部、京都、神戸。第 3 グループは、130 以下の北海道、東北、九州、沖縄である。(表 2)

表2 1教会信徒平均人数による3つのグループ

全教区の平均人数175.9人以上	東京、横浜、大阪
175.9人～130人	北関東、中部、神戸、京都
130人以下	北海道、東北、九州、沖縄

「キリスト教年鑑2009」より筆者作成

図5は1教会あたりの司祭または執事の平均人数であるが、日本聖公会全体で0.73人ということから、全体的に聖職者が不足していることがわかる。唯一、東京教区だけが1教会あたり1人という状態を保っている。司祭の多くは、日本聖公会の信徒から日本聖公会が運営する神学校・神学院に進学することを踏まえれば、1教会あたりの信徒数が図抜けて多い東京教区では多くの司祭が生まれるのは不思議なことではない。⁷ 注目すべきは、0.6人を下回る北海道、東北、北関東といった北部に位置する教区である。イギリス、アメリカ、カナダの各聖公会の日本における初期の伝道が西日本を中心に展開されたという歴史との関係の深さについても推測されるところである。⁸ 1教会に1人の司祭が常勤で勤務していないという状況は、複数の教会を掛け持ちしている司祭がいるということである。教会や教区の信徒数や、教会外での勤務も考慮しなければならないが、この教区における司祭の不足度は、司祭の忙しさの度合いを表すひとつの要素になることは疑いのないところである。

本章では、日本聖公会の組織像と、11教区の状況について述べてきた。次章で記述する、各教区での様々な青年活動はその状況が土台となって行われているわけである。ただし、青年活動の前提として存在しているという意味のみでなく、長きに渡る青年活動によって教区の状況が変化してきたということも事実である。青年の活動と、教区全体の活動や取り巻く環境、教区をまとめる日本聖公会の活動や状況は互いに作用しあいながら、変化し続けているのである。さらに、次章で紹介する青年活動の内容は、1992年10月から2009年5月までに掲載された記事をもと作成した情報であるため、青年活動と教区という環境の間にある時間軸のうえに存在する相互作用を猶の事意識しなければならない。

1 各教区の青年活動

本章では、11教区で行われている青年活動について日本聖公会が運営する日本聖公会全国青年ネットワーク事務局（愛知県名古屋市中区）が発行する機関紙『日本聖公会全国青年ネットワークニュース』の創刊準備号（1992）から第32号（2009）に掲載された記事から、

活動内容の分類を行い、比較することで各教区の特徴を詳述する。

3-1 日本聖公会全国青年ネットワークニュース

『日本聖公会全国青年ネットワークニュース』（以下、ネットワークニュース）は、1994年2月に創刊された日本聖公会の機関紙であり、日本聖公会の全教会、信徒に対して青年活動に関する情報を提供している。⁹ 第1号の冒頭記事にはこのような言葉が記されている。

お待たせしました。ここにネットワークニュースを創刊いたします。あの熱い青年大会から1年6ヶ月。天城山荘に集まった者同士の絆をなんとか大切にしたい。〔中略〕もっともっとお互いの絆を深めるために、そして活発なネットワークにするためにこのネットワークニュースを伝言板のように使ってください。みなさんの声がネットワークの記事です。（事務局）

「熱い青年大会」とは、1992年8月28日から31日に伊豆・天城山荘で開かれた「第1回全国青年大会」のことである。日本聖公会の全国の青年が一同に介し、学習と交流のプログラムを行うといった内容で、第1回以降、4年に1度開催されている。ネットワークニュースは、この第1回大会の実行委員会の働きにより創刊されることとなった。（創刊準備号1992）創刊当初は、発行元である日本聖公会全国青年ネットワーク事務局は京都教区内の教会に置かれていたが、第8号（1997.6）以降から、中部教区が運営する名古屋学生青年センターに場所を移した。それまでは、青年がボランティアで編集していたが、その作業を名古屋学生青年センターの職員が担当するようになったため、年に2、3回不定期に発行されていた状況が、事務局の移動以降、5月と11月の年2回に安定して発行されるようになった。

ネットワークニュースが果たす役割は、全国の教区で実施されている青年に関する情報の交換である。事務局は、全教区から記事を集めて、それらをひとつの新聞にまとめる。記事は、青年活動の内容報告や、他教区に対する呼びかけが主な内容となっている。分量は、号により多少のばらつきはあるが、概ね5、6ページである。各教区には、青年担当司祭が配置されており、事務局は担当司祭と連絡を取り合い、情報を収集している。ネットワークニュースには、全教区の青年活動内容のみが並列して掲載されているので、11教

区を比較するうえで、有効な資料といえる。本調査は、このネットワークニュースの記事をもとに内容分析を行った。



図 4 全国青年ネットワークニュース第 31 号 (2008,11)

3-2 活動内容の分類

ネットワークニュースの記事に書かれてある内容を分類した結果、「交流会」「信仰のつどい」「学習会」「キャンプ」「娯楽」「平和学習」「ボランティア活動」「他教区合同プログラム」「広報誌・青年委員会・青年プロジェクト」「エキュメニカル」「聖書学習」「海外交流」「定期的な会議」「青年活動への評価」という 14 のカテゴリーに集約された。まずは、各カテゴリーの具体的な内容を記述する。次節では、パーソンズの社会的行為に関する理論の枠組みを用い、それぞれの活動がどのような動機や目標によってなされた行為なのかということに着目しながら、諸活動の性質に言及する。

(1) 交流会

交流会は、教区内の青年同士が交流する活動である。東京、大阪、沖縄教区を除いた 8 教区は、広範囲に教会が分布しているという面からも、教区に広がる青年が集まり交流をするということは、そう簡単なことではない。教区内に多くの青年がいれば、教区を地区ごとに分けて交流会を開くことができるだろうが、少人数しかいなければそれも困難にな

る。単独のプログラムとして行われることもあるが、多くの場合は他の要素を含んだプログラムと複合して開かれることが多い。第 29 号 (2007,11) にはこのような記事が掲載されていた。

神戸教区 青年交流会 広島キャンプ報告 “ONE STEP FORWARD”

10 月 12 日～14 日に広島で行われた青年交流会に参加してきました。私はお隣の島根県に住んでいるのでたまに友達と遊びに行ったり、小学生の時も修学旅行が広島だったり、私にとってはとっても身近でよく知っている県でした。〔中略〕「広島に来て原爆について感じたコトを人に伝えるコト、伝えなくてはいけないコト」。私はまずもって広島原爆について知り、考え、それを人に伝えて行こうと思いました。

この記事に書かれた神戸教区の活動は、広島で原爆や平和について学び、交流を深めるという内容である。このように、交流会の手段として平和学習を企画する場合もあれば、他の目的や目標のために交流会を開催することもある。

(2) 信仰のつどい

黙想会や、修養会といったプログラムがこの活動にあたる。同じキリスト教の信仰をもつ青年が集まって祈ることで、個々人が精神的な安らぎを得ることが目的であると考えられる。集団となって祈りのときをもつことによって、仲間同士の連帯も深まるのかもしれない。宗教的な集団特有の活動といえる。

(3) 学習会

教区、教会またはそれらを横断したグループが取り組んでいる社会問題に関連するテーマについての学習会である。内容は、歴史教科書の改訂問題のような教育に関するものや、在日韓国・朝鮮人、在日外国人、セクシャルマイノリティへの差別といった問題が含まれている。なお、戦争や平和に関する学習会は、これらとは多少異なった位置づけで行われている傾向が各教区ともあるため、独立したカテゴリーとして設けている。(項目 (6) を参照) 学習会は、キリスト教会がもつ中心的な役割である礼拝機能という以外に、キリスト教精神に基づいて社会に働きかけを行うという役割を担ううえで、その最初の段階の活動である。学習会の内容によって、各教区が興味・関心をもって取り組んでいる社会問題が明らかになる。その際に、各教区・教会がある地域に存在する背景によって取り組む社会問題の内容が規定されているという、教区・教会と地域社会との関連性にも目を向けな

なければならない。積極的に取り組む教区が、他教区よりも社会問題に対して熱心であるとは、必ずしも語ることはできない。

(4) キャンプ

キリスト教会では、子どもを対象としたキャンプが盛んに行われてきたという歴史がある。日本全国で多くのキャンプ場を運営している財団法人 YMCA 同盟も、キリスト教精神を基盤として設立された組織である。キリスト教会でキャンプが行われるのには、全ての教区・教会に共通するものではおよそ二つの理由が考えられる。まず、教育的な目的のもとに行われる場合である。子どもを対象としたキャンプには必ずといっていいほど、この要素があるだろう。ただし、他の宗教が関連しない団体のキャンプと異なるのは、教育の中に幾分かキリスト教を土台とした宗教教育という意味合いを含んでいる点である。2つ目は、子ども世代に自分たちの信仰を伝えるという理由である。それぞれの度合いは、教会や教区の主催者のキャンプにおいて重点をどこにおくのかといったことによって、差異が生じるところではあるが、このどちらかの要素がまったく存在しないキャンプはおそらくないだろう。そのキャンプが、どの年齢層の子どもを対象としたものかによっても目標や目的が変わってくる。

また、子どもを対象としたものではなく、参加者が青年のみキャンプもわずかに行われている。このキャンプは、自分たちの信仰を深めるためや、仲間との交流をもつために行われる場合や、娯楽目的で行われる場合が考えられるが、教区内で実施されるキャンプで娯楽目的のみで開かれるものは存在しないといっていいだろう。娯楽目的というのは個人単位の目的としては十分にあり得るだろうが、集団としての統一した目的にはなり得ない。

(5) 娯楽

スポーツ大会や、ゴスペルを歌うといったような楽しむこと自体が目的の大部分を占めている活動である。一方、娯楽を通して教区や他教区の青年と交流を深めるといった狙いがあることもあろう。

(6) 平和学習

主に、広島、長崎、沖縄への宿泊を伴う研修プログラムが各教区で行われている。宿泊を伴わずに、講師を呼んで行われる場合や、青年のみで沖縄の米軍基地問題や憲法九条に関する問題などについて学習会が開かれることもある。とりわけ、戦争によって甚大な被害を受けた地域を含んでいる教区では、平和な社会を作り上げるための活動を教区・教会の使命的役割と捉えているということもあり、積極的に行われている。とくに、沖縄（沖

縄教区)、長崎(九州教区)、広島(神戸教区)で活発に行われている。

(7) ボランティア活動

ボランティアとは、さまざまな福祉活動に無報酬で自主的自発的に参加する人のことを指す。(社会学事典 1994) 日本聖公会には関連する特別養護老人ホームや児童擁護施設などの社会福祉施設があり、それらの施設がボランティア活動の場となっていることが多い。宿泊を伴う研修の中にボランティア活動がプログラムとして組み込まれている場合もある。

(8) 他教区合同プログラム

複数の教区によって行われる活動である。その形態には、いくつかのパターンがある。一つ目は、中心となって企画する教区と部分的に協力をする教区(場所の提供など)とに分かれる場合。二つ目は、ひとつの教区が全て企画し他の教区に対して参加を呼びかける場合。三つ目は、複数の教区の青年が集まって、すべての計画を行う場合である。最も多いのは一つ目のケースであり、三つ目に関してはほとんど見られなかった。

(9) 広報紙・青年委員会・青年プロジェクト

この活動は、教区内での青年活動に関する情報を主とした広報紙・機関紙の発行、教区独自に設けられた青年委員会に関連する活動、青年と教区が連携し合って行われる中長期的活動である青年プロジェクトのことを指す。これらの活動に共通する点は、教区からの財政面でのバックアップが必要であるということである。広報紙の発行には教区のいくらかの財政負担を必要とするし、青年委員会や、青年プロジェクトの計画が教区としての正式な活動として扱われるのであれば、それらの用途専用の予算を設ける必要も発生する。予算の計上には、教区の予算委員会で決議されなければならない。青年活動に対する各教区の姿勢とともに、各教区の財政状況とも関連した内容であると考えられる。

(10) エキュメニカル

エキュメニカルな運動とはエキュメニズム(ecumenism)に基づく運動であり直接的には教会一致促進運動のことをさす。本論文においては、他宗派や他教派との協力した活動を示す。エキュメニカルな活動の活発さは、各教区の活動方針を示す指標ともなりうるだろう。また、一方で、エキュメニカルな活動をすることによる意味を何に見出しているのかといった点にも注目しなければならない。各教区によって、該当する地域内での他宗派の教勢や活動は様々であり、日本聖公会の教区活動もそれらの他宗派の影響を受ける可能性は十分にある。エキュメニカルな活動といっても、他宗派からの積極的な呼びかけによってなのか、日本聖公会からの呼びかけによって成されているのかという点によっても、

その意味合いが異なってくるだろう。

(11) 聖書学習

キリスト教の信徒にとって、聖典である聖書について学習することは、いわば信仰の原点に返ることでもある。聖書に対する理解を深め、自分自身と教会やキリスト教との関係を見つめなおしたいという思いから行われることが多いだろう。とりわけ、近年では日本聖公会にかぎらず日本のキリスト教団体では、青年の教会離れという問題が浮上している。(キリスト新聞社から「次世代の教会をゲンキにする応援マガジン」というキャッチコピーで発行されている季刊雑誌『Ministry』の2009年夏号には「青年をどうする？」という特集が組まれている。) その中でも教会と関っている青年たちから生まれる、聖書に立ち返ろうという思いが動機となって企画されているのかもしれない。

(12) 海外交流

日本聖公会は、世界の連合組織でもある Anglican Communion (聖公会) のひとつの管区を成しているということもあり(組織概要については2・1を参照)、日本以外の管区や教区とのつながりから、海外の交流が行われている。とくに、各教区には外国の教区と姉妹教区関係を結んでいる場合もあり、交換留学が行われている教区もある。海外交流は、おもに姉妹教区とのものが多い。海外交流が行われている意味については、各教区に与えられた特有の地域的課題に取り組むうえで、海外の教区との連携の必要性を感じたからだと推察される。例えば、中部教区の名古屋学生青年センターでは、「就学の機会が奪われている在日フィリピン人の子どものための学校」である「国際子ども学校」が運営されており、フィリピン北中央教区と姉妹教区関係を結んでいる。この提携は、名古屋で生活している多くの在日フィリピン人女性の子どもの教育問題という地域的課題に対応するためのものである。海外交流は、青年個人の意志というよりも、教区として計画している活動の枠組みの中で行われている。

(13) 会議・準備会

青年が実施するプログラムの会議や、実施が決まっているプログラムの準備会のことで、目的が明確になっているという点がこの活動の特徴である。会議や準備会の回数が多いほど、企画されたプログラムは充実した内容となる。また、青年自身による会議や準備会の実施は、その教区でそれだけ青年が主体となって青年活動を行っていることを示している。

(14) 青年活動への評価

ネットワークニュースには、教区の青年活動が教区委員会や教区の最高責任者である主教から一定の評価を得たという内容の記事がいくつか掲載されていた。件数こそ少ないが、この記事がネットワークニュースに投稿する意図は、青年活動は日本聖公会の〇〇教区の活動であるという認識の明確化であり、他教区へのアピール行動である。青年のもつ教区への帰属意識を表しているともいえる。

3-3 社会的行為としての諸活動

教区の青年活動を社会的に分析し、比較するためには、各教区の青年活動ひとつひとつを社会的行為として捉え直さなければならない。本節では、行為の構造と、動機によって分類される行為類型について先行研究に基づいて言及したうえで、教区の活動内容について図表を用いて説明する。

(1) 社会的行為の定義

行為とはなにか。『行為の総合理論をめざして』では、行為とは「規範に従ったエネルギーを消費することによって、状況内の目的に達するように方向付けられたもの」と定義されている。(Parsons & Shils 1951) 行為とは、社会学の研究対象を説明するための説明概念であるのに対し、社会的行為とは社会学の研究対象である。安田三郎は、社会的行為を、「他者に影響を及ぼし、かつ/あるいは他者から影響を受けている行為=行動」、または簡潔に「社会的行為とは他者を客体とする行為」と定義している。この定義にある「客体」には、主観的に規定した状況の要素のみでなく、客観的な要素も意味しているものも含まれている。(安田 1980)

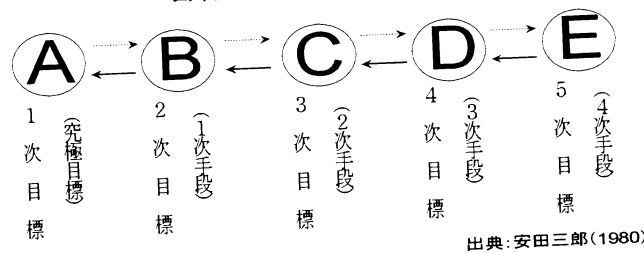
また、行為とは多くの場合では何らかの目標をもっている目標志向的行為であると考えられる。とりわけ、本論文で取り上げたネットワークニュースに掲載されている日本聖公会の教区青年活動はすべて目標志向的行為であるため、本論文での行為に関する言及は目標志向的行為に限定する。

(2) 行為の構造

一つの目標志向的行為は、その目標を達成するためには手段を必要とし、その手段を必要とするためには、さらに1段低い手段を必要とする。(安田 1980) この事実は、行為が目標と手段による連鎖的な構造から成っていることを示している。目標と手段の連鎖構造を図示すると図7のようになる。B、C、D、EはそれぞれA、B、C、Dに対して小さい

行為〈下位行為〉であるといえる。(安田 1980) 目標の設定は、1 次目標から始まって下位に及ぶが、目標の達成は下位目標から順次上位へさかのぼっていく。

目標と手段の連鎖構造

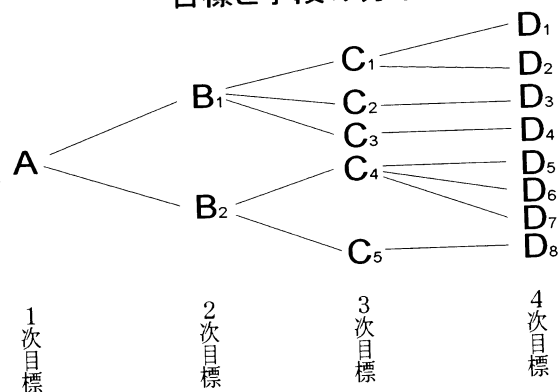


出典: 安田三郎(1980)

図 5 目標と手段の連鎖構造

以上が、行為のもつ目標と手段の連鎖構造という性質である。しかし、実際に我々がおこなっている行為はこの連鎖構造のみでは説明がつかない。それは、1 次目標の達成のために複数の 2 次目標達成が必要となる場合、さらに 2 次目標の達成のために複数の 3 次目標達成が必要である場合もあるからである。このときには、目標が下位になればなるほど、枝分かれしていく。(図 8) その分枝構造と上述の連鎖構造を含むことによって行為の中には目標と手段の〈重層構造〉が存在するようになる。(安田 1980)

目標と手段の分子構造



出典: 安田三郎(1980)

図 6 目標と手段の分枝構造

行為のもつ重層的性質に焦点をあてることによって、それぞれの青年活動という行為が比較的上位の目標のもとになされているのか、それとも下位目標のもとでなされているのかということに論点を移すことができる。青年活動の目標・目的は青年がその活動にどの

ような動機をもって参加しているのかということにも関連する。動機づけは、行為について考察するうえでは極めて重要なファクターである。行為とは、個人としての行為者にとって、あるいは集合体の場合ならそれを構成する諸個人にとって、動機づけ上の意義を有している、行為者—状況体系における一過程だからである。(Parsons 1951) また、動機とは、欲求と義務が含まれるが、本論文で考察する青年活動の多くは義務的なものではないと仮定してもよいと、欲求についてさらに細分化した議論をしなくてはならない。¹⁰

(3) 道具的行為、表出的行為、道徳的行為

パーソンズは、個人行為者の欲求性向の体系には「欲求充足」の側面と、「指向の」側面という二つの側面があると論じている。欲求充足の側面とは、行為者と客体界との相互交換の「内容」にかかわっており、つまりは行為者が客体界との相互作用から「何」を手に入れ、その「代価」として何を払うかということが重要になる。指向の側面は、行為者の客体界に対する関係の「仕方」である。さらに、客体が何であるか、またはその客体の意味について思考する際には、「評価」という基準が加わる。評価的側面は、すべての具体的な行為指向にみられる。(Parsons 1974) ここで、それぞれ側面という言葉を用いているのは、実際の具体的な行為には 3 つの要素が共通してみられるからであり、行為の分類は、それぞれの要素の相対的優位さによって決定づけられるものだからである。

このような動機づけの分析によって、行為を 3 つの型に分類することができる。指向の側面が大きい、つまり与えられた目標の到達に関して認知的信念が優位を占める行為を〈道具的行為〉。欲求充足的な（カセクシス的）、つまり表現記号が優位を占める行為を〈表出的行為〉。評価の基準が優位を占める行為である〈道徳的行為〉の 3 つである。(Parsons, & Shils 1951) しかしながら、先にも述べたように、この 3 つの要素はすべての具体的な行為に存在しているといえるため、具体的な行為を明確に分類することはそう簡単なことではない。

一つの行為でも、究極目標に近いものであれば道具的行為の側面が強くなるが、遠い距離にある行為であれば動機づけのうちの道具的側面が弱くなり、表出的行為となる場合もあるからである。安田は、道具的側面の動機づけが弱くなる原因を次の 2 つに集約している。1 つ目は、目標—手段の連鎖が長くなって究極目標の達成への適合性に確信がもてないとき。2 つ目は、したいあるいはしなければならない他の行為が並列して存在するときである。(安田 1980)

以上で説明した行為の重層構造的性と、パーソンズによって理論づけられた行為の類型に

従って、次では教区の青年活動の特徴に迫りたい。

(4) 各活動の行為的分類

上述した理論に基づいて、14種類の活動を表出的行為、指向性が強い道具的行為、道具的行為、道徳的行為の4グループに分類した。以下の4分類を用いて、次節では教区の比較分析に移りたい。

① 表出的行為（交流会、信仰のつどい、娯楽、ボランティア活動、聖書学習）

これらは、表出的行為と考えられる。交流会は、青年の親交を深めるために開かれる。参加者にとっては、教区の若者との交流を楽しむという自己充足的側面が強い。一方で、中心となって企画する者は、違うプログラムへの人的資源の発掘を目的として計画されている場合も考えられる。そのような企画者にとっては、交流会は道具的行為として位置づけられているだろうが、交流会は究極的目標からは非常に遠いため、中心人物にとっても道具的な側面が弱まる要素がある。また、企画者よりもそうでない参加者の方が数的に多いことを考えると、交流会は表出的行為と捉えてよいだろう。

娯楽、ボランティア活動、聖書学習も同様である。これらは、参加者の動機が、極めて個人的なところに委ねられている。

② 指向性が強い道具的行為（キャンプ、海外交流、会議・準備会）

青年が主体となって行われる子ども対象のキャンプは、プログラムの会議、参加者の募集、キャンプ場の確保など、いくつもの準備段階を経て行われる。そこには、その準備段階において、キャンプは上位の目標に位置しており、キャンプの実行は究極目標のうちに入ってくる場合も考えられる。キャンプの実行は、キャンプという行為において、究極的な目標であると同時に、次の世代への信仰の伝達といった長期的な目標においては手段として下位に位置している行為でもある。

会議・準備会は、集まりとして明確な目的が設定され、公表したうえで開かれるため、道具的行為であるといえる。海外交流は、青年個人の思いだけではほぼ不可能であり、教区・教会の協力を必要とするため、3章2節で紹介した中部教区とフィリピン中央教区の交流というような場合にみられる、具体的な目標がなければ行うことができない。

③ 道具的行為（学習会、平和学習、他教区合同プログラム、エキュメニカル）

単発で、知的欲求のために開催される学習会は自己充足を目的として開かれるので、表出的行為といえるが、各教区で開催される学習会の内容は、現在日本社会に課せられた社会問題であることを踏まえれば、その学習会は社会に対するソーシャルアクション

という目標の下位に位置している道具的行為であると捉えることができる。¹¹ 平和学習という行為の究極目標には、平和な社会の実現という理想が存在しており、学習会はその下位行為である。ともに、道具的行為として参加している人が多い活動である。

エキュメニカルと他教区合同プログラムに関しては、明確な行為分類をすることに多少の困難はあるが、エキュメニカルという活動の特徴については、道具的要素が表出的要素よりも多少勝っていえるかもしれない。それは、近年のキリスト教全体に流れるエキュメニカル・ムーブメントの中で、諸教派とも将来的には教派を超えた連携と共存を目指している初段階であるという背景によるものである。各教区で行われているエキュメニカルな活動が、そのような将来展望のもとでなされていれば、それは道具的行為といえる。また、日本聖公会が教区としての独立性が非常に強いという特徴をもった教派であることを考慮すれば、教区合同プログラムにも共通した意味合いが含まれると想定できる。

④ 道徳的行為（広報紙・青年委員会・青年プロジェクト、青年活動への評価）

教区の強力な支援と、承認のもとでおこなわれるこれらの活動は、広報するという目標のための広報紙の発行、青年を組織する青年委員会、教区公認の活動として行われる青年プロジェクトという道具的側面に加え、対外的なものの評価を強く意識する評価的要素もある程度の割合を占めている。広報誌によって青年の活動を幅広い範囲に知らせることは、教区内や教区外からの何らかの評価を得ることに関連するし、行為の段階に評価されることが十分に想定されるからである。青年委員会・青年プロジェクトも、表면에〇〇教区という看板が加わるために、個人的な集団として行う活動よりも評価の対象として認識されやすくなる。青年活動への評価に関しては、分類が難しいところだが、その内容をネットワークニュースへ寄稿する段階に、全教区からの評価対象になるということか想像できるため、道徳的行為と捉えることができる。

3-4 11 教区の比較

ネットワークニュースの記事から、各諸活動の内容を表す要素を抽出して集計した結果、要素の総数は 890 に及び、その内教区が行った活動に関するものは 632 であった。¹² その要素の実数をグラフで比較したものが図 9、値を具体的に記したものが表 3 である。この図表に記されている値は、それぞれが各内容における教区の青年活動の「活発さ」の指標として捉えることが可能である。

各教区 記事要素の値

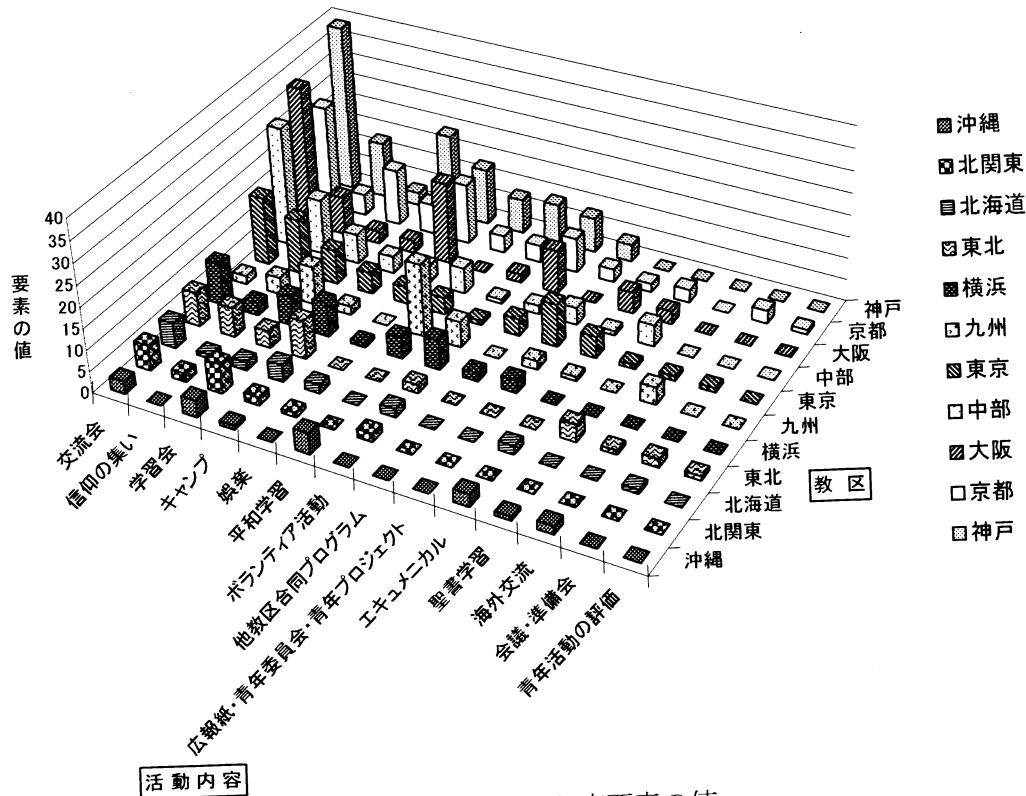


図 7 各教区 記事要素の値

(「日本聖公会全国青年ネットワークニュース」をもとに筆者作成)

表3 11教区の活動内容

		教 区										区		活動内容別 合計
		沖縄	北関東	北海道	東北	横浜	九州	東京	中部	大阪	京都	神戸		
活 動 内 容		3	6	6	8	10	2	16	28	33	24	39	175	
	交流会	3	6	6	8	10	2	16	28	33	24	39	175	
	信仰の集い	0	2	1	7	3	4	13	13	9	5	13	70	
	学習会	4	7	2	4	7	9	8	7	3	13	3	67	
	キャンプ	1	2	4	9	8	2	5	4	3	7	19	64	
	娯楽	0	1	2	0	1	0	4	4	19	14	13	58	
	平和学習	5	0	0	0	5	17	4	6	0	4	8	49	
	ボランティア活動	0	2	2	2	7	6	1	1	2	4	9	36	
	他教区合同プログラム	0	0	0	0	2	0	4	2	10	8	8	34	
	広報紙・青年委員会・青年プロジェクト	0	0	0	0	3	2	10	4	0	3	4	26	
	エキュメニカル	3	0	2	0	0	1	5	1	5	2	0	19	
	聖書学習	1	0	0	4	0	0	1	5	3	3	0	17	
	海外交流	2	0	0	1	0	4	1	0	0	0	0	8	
	会議・準備会	0	0	1	2	0	0	1	0	0	3	0	7	
	青年活動の評価	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	
教区別 合計	19	20	20	38	46	47	73	75	87	91	116	632		

(「全国青年ネットワークニュース」より筆者作成)

(「全国青年ネットワークニュース」より筆者作成)

まずは、11 教区全体の様相について述べておきたい。注目すべき点は、神戸、京都、大阪、中部、東京教区の合計数はすべての要素の約 69.9%を占めるという事実である。東京教区を除いた他教区の値を見てみると、隣接する神戸、京都、大阪、中部教区から離れ

た距離にある教区ほど、値が小さくなっていることがわかる。一方で、東京教区のみがその傾向に反して活発な青年活動が行われている。この点に関しては、本節の（１）で説明を加えるものとする。日本聖公会 11 教区では、神戸、京都、大阪、中部教区から遠い距離に位置する教区ほど、青年活動が不活発になっている。さらに、神戸、京都、大阪教区を中心となっている主教座聖堂の位置まで含めば、その分布は関西と中心とした広がりをもっているといえる。（図 10）

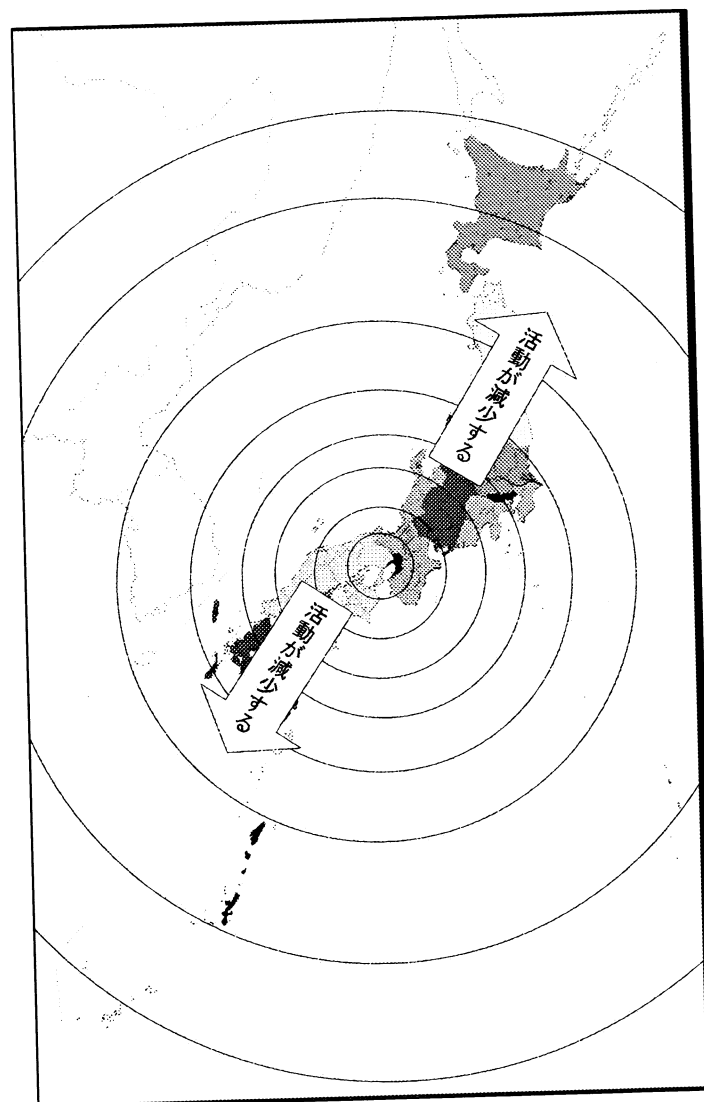


図 8 青年活動の分布（筆者作成）

以上の全体的な分布を把握したうえで、以下では細かい内容について触れていく。

(1) 信徒数、信徒の割合と青年活動

教区の青年活動を構成するうえで、最も重要な要素とは、活動の主体を担っている青年である。そもそも、青年がいなければ青年活動は起こりえないのである。まず、ここでは教区の信徒数や教区内の人口に対する信徒の割合と、青年活動の活発さの関連性に焦点を当てる。表4は信徒総数、1教会あたりの信徒数、信徒率、記事の合計数と、表出的行為、指向性の強い道具的行為、道具的行為、道徳的行為について、値の高いものを上位から並べたものである。11教区の青年活動が、関西地方を中心として同心円状の広がりをみせていることは先に述べたことであるが、東京のみがやや例外的に関東でありながら青年活動が活発であった。その理由は、この表から説明ができる。

表4 信徒数、信徒率と活動内容の値

信徒		1教会あたりの信徒		信徒率※		合計数		表出的行為		指向性の強い道具的行為		道具的行為		道徳的行為	
東京	14605	東京	365.1	東京	0.116%	神戸	116	神戸	74	神戸	19	九州	27	東京	11
横浜	9241	横浜	256.7	沖縄	0.104%	京都	91	大阪	63	東北	12	京都	27	中部	9
京都	5661	大阪	207.3	大阪	0.063%	大阪	87	京都	47	京都	10	東京	21	京都	7
大阪	5597	北関東	145.9	京都	0.049%	中部	75	中部	46	横浜	8	神戸	19	東北	5
北関東	4086	中部	138.0	横浜	0.047%	東京	73	東京	34	東京	7	大阪	18	神戸	4
神戸	3822	神戸	131.8	北海道	0.047%	九州	47	横浜	21	九州	6	中部	16	横浜	3
中部	3451	京都	131.7	北関東	0.029%	横浜	46	東北	17	北海道	5	横浜	14	大阪	3
北海道	2643	沖縄	117.8	東北	0.025%	東北	38	九州	12	中部	4	沖縄	12	九州	2
東北	2384	北海道	105.7	中部	0.025%	北海道	20	北関東	11	沖縄	3	北関東	7	沖縄	1
九州	2025	九州	96.4	神戸	0.022%	北関東	20	北海道	11	大阪	3	北海道	4	北関東	0
沖縄	1413	東北	91.7	九州	0.015%	沖縄	19	沖縄	3	北関東	2	東北	4	北海道	0

※九州庁・国勢調査（2005）に基づく教区に該当する都道府県の人口に対する信徒の割合

※信徒率は国勢調査（2005）に基づく教区に該当する都道府県の人口に対する信徒の割合（「国勢調査（2005）」、「キリスト教年鑑2009」、「日本聖公会全国青年ネットワークニュース」をもとに筆者作成）

東京教区の青年活動に言及するときには、11教区で最も信徒数の規模が大きいという特徴を前提としなければならない。表4によれば信徒総数、1教会あたりの信徒数、人口に対する信徒率の3つの項目において、他の教区よりも抜きん出ていることが分かる。この圧倒的な信徒規模であれば、それだけ青年活動に重要な要素である青年という人的資源も豊富であると考えられるため、記事の合計数も11教区で最も多くなるのが必然的であると思われるが、実際は神戸、京都、大阪、中部に次いで4番目の値しか示していない。この事実は、上述した関西地方を中心とした同心円上の分布という法則をより強化するものになる。さらに、我々が安直に想定しがちな、信徒が多ければ活動はより活発に展開されるという関係は、実際には成立していないことがわかる。

(2) 教区の財政と青年活動

表4からは、東京教区がもつ他の特徴も伺うことができる。それは、「広報紙・青年委員会・青年プロジェクト」の値が他教区の同活動に比べて、大きいということである。3・2

で述べたように、この活動の特質は教区の金銭的な支援が必要なことである。1 教会あたりの信徒数が、教区の財政状況に直接的な影響を与える要素であること、その水準において東京教区が 11 教区で最も高いことは 2・2 で説明した通りである。もちろん、財政面に余裕のある教区が青年活動に対して、必ずしも積極的な投資をしているわけではない。同様に 1 教会あたりの信徒数が多い横浜教区ではそのような現象が見られない。しかしながら、教区に財政的な余裕があれば、青年が主体となって計画された活動に、予算がつきやすくなるのは言うまでもない。青年活動には、金銭的支援というハードな面によっても支えられているという一面が存在するのである。

(3) 活動の活発さと行為類型

ここでは、教区の青年活動の活発さの度合いと 3・3 (4) で分類した行為類型との関係を見ることによって、活発な教区、不活発な教区の青年活動の傾向について考察する。図 11 は、表 4 に基づいて分類したグループにおける行為類型の割合を表したものである。

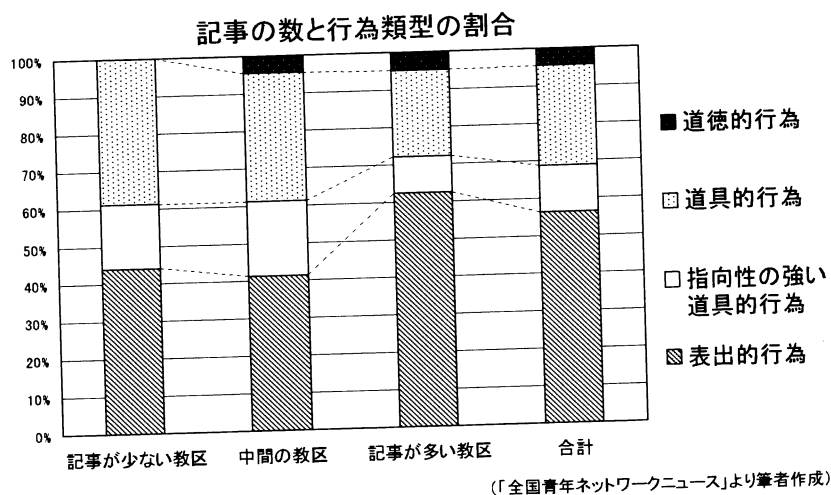


図 11 記事数による分類したグループの行為類型

多くの記事が掲載されている教区では表出的行為が 6 割を占めているが、記事の少ない教区と中間の教区は、4 割程度に収まっている。その分、指向性の強い道具的行為と道具的行為の割合が多いが、道徳的行為は 1 つもない。この比較から読み取れることは、青年活動が盛んな教区では表出的行為が極めて高い割合を占めるということである。しかし、活発さと比例して割合が増えるわけではなく、青年活動がそれほど活発ではないが不活発でもない中間のグループと青年活動が活発なグループの間にその境界線のようなものがある。

る。

一方、道徳的行為は青年活動の活発さに比例してその割合が増す。活動が活発になれば、それだけ周囲からの目にさらされる機会が増え、評価の対象となりやすくなるという点から説明できる。

(4) 沖縄、九州市教区の平和学習

図 12 は、教区ごとの行為類型の割合をグラフ化したものである。

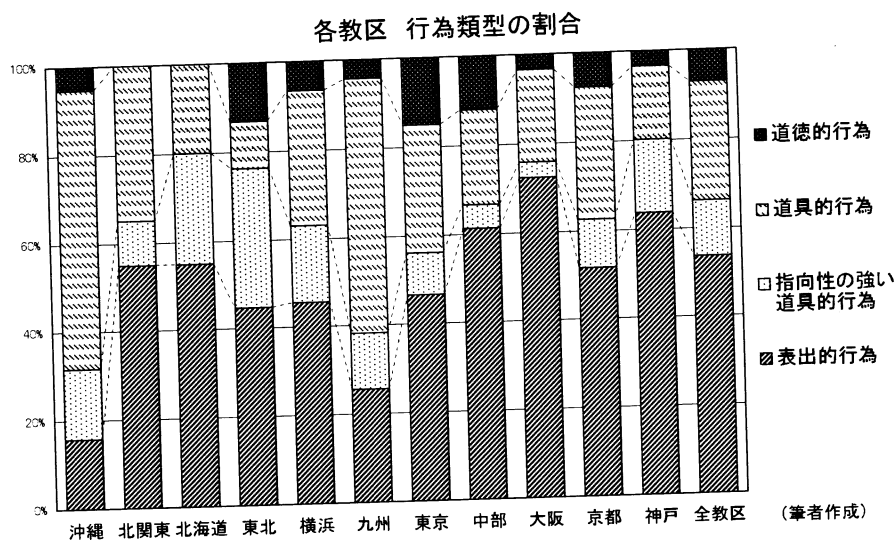


図 9 教区の行為類型割合

全教区の割合を見てもわかるように、ほとんどの教区において表出的行為の占める割合が高くなっている。そのうちで、沖縄と九州市教区が他の 9 教区に比べて表出的行為割合が低く、[指向性の強い道具的行為+道具的行為] 割合が高いことに注目したい。沖縄ではその合計は約 8 割、九州市教区においても約 7 割を占めており、そのうちの 3 割以上 (15 のうち 5)、5 割以上 (33 のうち 17) が「平和学習」である。沖縄教区と九州市教区が平和学習に対して積極的に取り組んでいるのは、それぞれの地域的な要因が深く関連している。沖縄県は、太平洋戦争時、日本で唯一の地上戦が行われた場所であり、集団自決に関する教科書検定問題や、在日米軍基地問題など未解決な問題が山積しており、沖縄教区の平和学習はそういった内容について行われている。九州市教区には、被爆地である長崎県が含まれており、教区では長崎での泊まり込みの研修が年 2 回開かれている。

沖縄、九州市教区で平和学習が頻繁に開かれているのは、教区内地域が抱える地域的課題

によって目標が与えられているからである。

(5) キャンプが活発な教区

指向性が強い道具的行為の中で、最も割合の高い活動である「キャンプ」がどのような教区で活発に行われているかを見ていこう。キャンプは、一度開催すると毎年の恒例行事となる可能性が高い活動である。なぜなら、参加した子供は対象となる学年・年齢を超えない限り翌年もリピーターとしての参加が望めるからである。ここでは、キャンプがどのような要因によって道具的行為の条件である上位の目標を与えられるのかについて、教区内にいる潜在的なキャンプに参加する可能性がある子供の人数との関係に焦点をあてて分析する。表5はキャンプに関する記事の数と、教区の教会学校ひとつあたりに在籍する子どもの数（教区内の総在籍数を教会学校数で割った数値）を1教会の平均信徒数で割った値をそれぞれ値の高いものから並べたものである。¹³ この値は、教区内の信徒に対する子どもの割合を表したものになる。キャンプの参加者になる可能性高い子どもを、教会に所属する信徒の子ども、教会学校に通う子ども、地域の子どもの順に仮定したうえでの比較である。

表5 キャンプの数と子どもの割合

キャンプの記事		1教会学校の在籍数 /1教会の信徒数	
神戸	19	東北	0.26
東北	9	北海道	0.25
横浜	8	神戸	0.21
京都	7	北関東	0.15
東京	5	京都	0.15
北海道	4	沖縄	0.14
中部	4	大阪	0.12
大阪	3	中部	0.11
北関東	2	東京	0.09
九州	2	横浜	0.08
沖縄	1	九州	0.08

（「日本聖公会全国青年ネットワークニュース」
「キリスト教年鑑2009」をもとに筆者作成）

この表によれば、キャンプの記事数が多い上位5教区のうち、神戸、東北、京都は教区内の子どもの割合においても上位5つのうちに入っている。このことから、多くの子どもが在籍している教区では、キャンプが活発に行われていることがわかる。この関係を、キャンプの道具的行為という性質から捉えたならば、次のような説明が可能である。キャンプを企画・実行する青年たちの動機となっている目標の達成という欲求は、キャンプに参

加する可能性が高い子どもたちが数多く存在し、さらに上位の目標が与えられることによって発生する。キャンプに限らず、教区で道具的行為的な活動がなされるときには、前項の平和学習についても述べたように、活動主体である青年に何らかの上位目標を与える客体が必要なのである。

2 青年活動が引き起こされる要因

前章では、教区の具体的な活動について詳しく見てきた。一見すると、キリスト教会における青年活動とは、主体となっている人間の内的なものから湧き出てくる動機によって自発的に行われていると捉えられがちであるが、実際には、動機は客体との相互作用によって引き出されているものである。その動機によって、青年活動は「引き起こされている」という表現が、社会学的な観点から見た場合には適切といえるかもしれない。本章では、これまで積み重ねてきた具体的な活動を概念化したうえで、青年たちから青年活動を引き起こしている、内的に存在する動機に密接に関連していると思われる要因について、重要なものは以下の2つに集約された。

4-1 客体から付与される目標

行為の動機を促すうえで、客体からの働きかけという要因は極めて大きなものである。前節で観察したキャンプ、平和学習や中部教区のフィリピン北中央教区との姉妹協定といった道具的な側面が強い行為には、強い目標志向性が見られる。道具的行為としての活動が活発な教区には、必ずその目標と密接に関連した外的な要因が存在していた。参加する子どもが集まるかわからない中で、キャンプの計画を進めたならば、キャンプをするという目標に対する志向性は弱まる。行為は「何か」を得るために何らかの「代価」を支払うということであるため (Parsons 1951)、客体から期待する「何か」が得られる可能性を低下させる他の要因が加われば (先のキャンプのケースでは、「子どもの参加する見込みの少なさ」である)、目標志向性は低下し、その行為からは道具的側面が薄れ、表出的な側面が強まるか場合によっては行為の中断に至ってしまうのである。キャンプは、子どもが少ない教区でも行われていた行為ではあるが、回数を重ねて毎年の恒例行事にまで発展させるためには、キャンプという目標に対する志向を阻害する要因が少ないという状況が必要である。

ここでは、目標とは客体から付与されるものであるということを強調しているが、それは客体からの一方的な刺激のみによって目標が与えられるということではない。客体からの働きかけは、個人に内面化され、そこからパーソナリティの欲求性向が引き起こされる。しかし、筆者は客体によって目標を与えられるという点について、強調してもし過ぎることではないと認識しているため、あえて「目標は客体から付与される」と言い切るという立場をとっている。

4-2 集団の膨張にともなう表出的行為の増加

前章でのネットワークニュースの活動数の比較により、その値が大きい教区の活動における表出的行為の割合が高いことについては述べた。活動数が多いということは、すなわち活動主体となっている集団の規模が大きくなっていることを示している。この集団の膨張に、なぜ表出的行為の増加が伴うのか。

表出的行為に分類された、信仰のつどい、聖書学習、ボランティア活動は行為としての欲求充足の側面を有しているとともに、キリスト教会としての象徴的行為という側面もある。表出的行為とは、欲求充足の様式のうでで成り立っているが、他者に対しては自我の態度がどうであるかに関する他者へのサインなのである。(Parsons 1951) 表出的行為のもつ他者への象徴的意義に着目すれば、そこに行為としての評価的側面が確認されるようになる。さらには、ここには小さくとも道具的側面も存在しているのである。この表出的指向、道具的指向、評価的指向の3つの指向が入手可能な場合には、行為者は価値という基準をもって選択を迫られるようになる。

道徳的行為とは、行為者の価値によって選ばれている場合が想定しやすい。東京教区において、道徳的行為が他教区より多かったのは、東京教区の信徒的規模の大きさから説明できる。集団が膨張すれば、ひとつの状況の中で指向の選択という作業が求められるからである。また、集団に所属する個人の数が増えれば、客体が集団に及ぼす刺激が多くの個人に分散されるために、個人に対しては強い目標の付与が行われないということも考えられる。このように、集団の膨張に伴い、社会的要因が個人に及ぼす影響力が現象されていくので、個人の行為は欲求充足指向が強調された表出的行為、もしくは評価的指向が動機となっている道徳的行為になりやすいのである。

3 結論

ここで、もう一度、本論文の目的に振り返って、最終的に得られた結論についてまとめておこう。

本論文の目的は、一般的には宗教的な思想や信仰の実践という言葉で片付けられてしまいうことが多い宗教的な集団をフラットな視線から捉えなおし、自己と他者や環境をも含む客体との相互作用に着目するという社会学的な視点に立って、分析することであった。

分析と考察の結果、行為のきっかけとなる動機づけが、様々な客体との相互作用によって形成され、その後も常に変化し続けているものであるという理論が、日本聖公会の 11 教区での青年活動にも適用されるということが明らかになった。また、それぞれの教区が他の教区とは異なった特有の背景や条件のもとに成立し、その中で活動しているという実態も浮き彫りとなった。キリスト教会（広義の意味）での多岐に渡る活動が、パーソンズの表種的行為、道具的行為、道徳的行為という行為の側面的要素に基づいた理論的枠組みを用いれば、分類が可能であり、各活動が内包する意味合いについて伺い知ることもできるということである。その一方で、行為の類型を明確に区別・分類することは極めて困難な作業であることも事実である。行為には、必ず 3 種類の指向に基づいた行為的側面が存在しており、それは密接に関連しあっているからである。行為とは、目標と手段の連鎖構造、目標と手段の分枝構造とが重なり合って重層的な構造をという性質がゆえに、その関連性を断ち切ることは不可能である。

本研究では、宗教的集団内での行為を、信仰というある種宗教的活動を支えている重要なファクターを無視するかたちで進めた。教会活動に対して、社会学の視点に基づいて、客観的な分析と考察を行った点で、本研究は意義のあるものであったと思う。

今後の諸研究では、本研究のようなスタンスに加えて、主体となっている個人に客体による目標の付与と本人の信仰がどのような結びつきを成しているのかという点にも触れていただければ、宗教的行為を引き起こす新しい要因の発見につながるだろう。

[注]

1 宗教団体および宗教法人の信者総数の内訳は、神道系 106,817,669 人、仏教系 89,177,769 人、キリスト教系 3,032,239 人、諸教系 9,817,752 人である。

2 青年とは一般的に 14、5 歳から 24、5 の男女のことをさす。しかし、日本聖公会では特

に青年に関する年齢や性別などの規定が存在するわけでないので、青年であるという事実は本人の自覚に委ねられる。本論文では、青年として自覚たうえで行っている活動、もしくは周囲から青年による活動と認知されているものを青年活動と呼ぶ。

3 日本聖公会では、信者のことを一般的に信徒と表現するため、本論文でもこの信徒という用語を用いる。日本聖公会では、受洗すると同時に教会での籍（教籍）を得ることになり、教籍をもつ人のことを信徒としてカウントしている。聖公会には、洗礼と堅信という儀式があり、堅信とは本人のキリスト教に対する信仰を表明する意味をもつ儀式で、本人の意思によってでしか行うことはできない。また、日本聖公会は幼児期に受ける洗礼（幼児洗礼）を採用している。

4 聖公会の聖職とは、主に主教、司祭（牧師）のことであるが、司祭になるためには最低でも2年間の執事という役職の期間が必要とされている。ここでは、司祭と執事に加え、伝道師、退職後も常勤もしくは非常勤で勤務している退職司祭も含めて教師と分類する。

5 日本聖公会は、毎日曜日の主日礼拝で聖餐式と呼ばれる儀式をおこなう。聖餐（陪餐）とは、聖書に描かれているイエス・キリストの死と復活を記念するための儀式のことであり、日本聖公会では主教と司祭しか執り行うことができない。（近年では、司祭不足という現状によって、聖餐式が行われない主日もある）

6 教区では、司祭や執事のほかに退職司祭や聖職候補生が勤務していることがある。ここでは、司祭不足という状況を補うために非常勤で主に聖餐式の執行を担当している立場である退職司祭と、まだ聖職という役職を認められていない聖職候補生は除いた。

7 2009年時点で、日本聖公会には聖公会神学院（東京都世田谷区）とウィリアムス神学館（京都市上京区）が聖職者養成機関としての役割を担っている。

8 1887年に、日本聖公会第1回総会が開かれ、日本聖公会が組織として成立する以前に大阪や京都で活発な宣教活動がなされていたことが『宣教事始め』（日本聖公会京都教区2009）に詳述されている。

9 創刊に至るまで、1992年10月に創刊準備号、1993年10月には創刊準備第2号が発行されている。

10 青年活動が欲求充足のためにのみ行われているわけではなく、そこに義務的な要素も含まれていることも事実であろう。しかし、日本聖公会では信徒に対して罰則規定がある義務づけられた行為は実質的には存在しない。青年の中に、諸活動に対する義務的な思いが発生していることもあるだろうが、その義務的な心というのは行為の構造という枠組みで捉えるならば、目標に対する指向という欲求充足の過程に生じる極めて心理的な現象である。

11 ソーシャル・アクションとは社会福祉活動の一つの形態を示す用語であるが、社会に対する積極的な働きかけという意味合いを含ますためにここではこの言葉を用いた。

12 632以外の257の値は、管区全体と名古屋学生青年センターの活動によるものであり、本研究の分析対象からは除外している。

13 教会学校とは、キリスト教会で、幼児から主として青少年までを対象に行われる信仰教育の総称である。日曜日の礼拝やミサの前後に開かれることが多いため日曜学校とも呼ばれるが、日曜日に限定されるものではない。（片山はるひ 2002）

[参考文献]

Howard S. Becker, 1963, *Outsiders: studies in the sociology of deviance*, Free Press of Glencoe, (=1993, 村上直行訳, 『アウトサイダーズ: ラベリング理論とはなにか』新泉社)

- 今橋朗,徳善義和,1996,『よくわかるキリスト教の教派』キリスト新聞社
- 井上順孝,孝本貢,対馬路人,中牧弘充,西山茂編,1994,『新宗教新辞典』弘文堂
- 井上順孝,2009,『人はなぜ『新宗教』に魅かれるのか?』三笠書房
- 加納重朗訳,2009,『宣教事始め(Ⅰ)(Ⅱ)』日本聖公会京都教区
- 共同訳聖書実行委員会,1987,『聖書 新共同訳一旧約聖書続編つき』日本聖書協会
- キリスト教年鑑編集委員会,2009,『キリスト教年鑑 2009 年度版』キリスト新聞社
- 日本聖公会全国青年ネットワーク事務局,1992-2009,『日本聖公会全国青年ネットワークニュース 創刊準備号—第 32 号』
- 大貫隆,名取四郎,宮元久雄,百瀬文晃編,2002,『岩波キリスト教辞典』岩波書店
- 小田垣雅也,1995,『キリスト教の歴史』講談社
- Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』日本評論新社)
- Parsons, Talcotto & Shils, Edward A. (eds), 1951, *Toward a General Theory of Action*, Haarvard U. P. (=1960, 永井道雄, 作田啓一, 橋本真共訳『行為の総合理論をめざして』)
- 釈迦福祉辞典編集委員会,2002,『社会福祉辞典』大月書店
- 田野崎昭夫編,1975,『パーソンズの社会理論』誠信書房
- 東京 YMCA 野外教育研究所編,1996,『野外教育の理論と実際』学文社
- 安田三郎ほか編,1980,『社会的行為』東洋経済新報社
- 脇本平也,1997,『宗教学入門』講談社
- William Foote Whyte, 1955, *Street corner society : the social structure of an Italian slum*, University of Chicago Press (=2000, 奥田道大, 有里典三訳,『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣 ;)

[参考 URL]

The Anglican Communion Official Website (<http://www.anglicancommunion.org/>, 2009.12.15)

文部科学省「宗教統計調査」(<http://www.mext.go.jp/>, 2009.12.15)

日本聖公会 (<http://www.nskk.org/>, 2009.12.15)

日本聖公会全国青年ネットワーク (<http://youthnskk.exblog.jp/>, 2009.12.18)

総務省 統計局「平成 17 年国勢調査」(<http://www.stat.go.jp/index.htm>, 2009,12,15)

40 次×30 行 29 ページ
400 字詰め原稿用紙 54 枚分